病気売ります

夢野供子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病気売ります

【Ｎコード】
Ｎ４４３４Ｊ

【作者名】
夢野供子

【あらすじ】
タイトル通りの、ちょっと不思議な物語です。

がっしゃーん。部屋中にガラスの破片が巻き散る。的にされた男は妻に怒鳴り、妻である女も夫に怒鳴り返している。互いの音がうち消し合い、会話はもう成り立っていない。

原因は夫が浮気をしているような気がした妻が、それを夫に何気なく聞き出そうとしたことだった。夫は否定した。「根拠は何か」と。それに対して妻は言った。「最近あなたは私に優しくない」と。確かに彼には覚えがあった。新婚当時は妻がちょっと風邪を引いただけで焦っていたが、今はそんなことでは死にはしない、と思えるようになっていた。だが、自分が妻に対して冷たいとまでは思わない。

「結婚して3年だぞ」
「だから何？」
「いつまでもちやほやされたいのか、お前は」
「そんなことは言ってない。ただ、夫としての優しさがあなたからは感じられないのよ」
「それは気のせいだ」
「いいえ、違う。やっぱりあなたは浮気してるのよ！！」
「証拠がないだろう！？」
「証拠にこだわることこそ最大の証拠だわ！！」

そして、今。部屋にはあらゆる物が散らばっている。ティッシュペーパーの箱、本、時計・・・。ケンカ開始からどれくらいの時間が経ったのだろう。女は腕が痛み始め、男は声が涸れかけている。
「もう良い、俺はちょっと出かけてくる。お前も頭を冷やせ」
「女の所へ行くのね？」

男はそれには深いため息で応じ、厚い扉を開いた。女は夫を見送るとその場に座り込んだ。夫が出ていったのは気にくわないが、正直ほっとしている。体力の限界がきていた。しばらくそのままで呼吸を整えると女はパジャマに着替え始めた。今日は日曜日でまだ外は明るいが、こんな気分の悪いときは寝るに限るのである。女はベッドに潜り込むとすぐに寝息を立て始めた。

女はチャイムで起こされた。ぼやっとした体を女は起こし、重い足取りで玄関へ向かう。あの人が帰ってきたのだろうか？そう思いながら扉を開けるとそこには見知らぬ女性が立っていた。２０代後半で黄色のシャツの上に赤のオーバーオールを着ている。

「病気、いりませんか？今なら安くしときます」

何だ、セールスか。女はそう思って断ろうとし、ふと思った。病気？びょうき、ビョウキ・・・？

「あの、ビョウキってなんですか？」

「病気は病気です。病のこと」

セールスウーマンは明るく答える。女は普段ならこんなふざけるにもほどがあるセールスは頑固として断ったはずである。だが、今彼女はヤケになっていた。ええい、重体にでもなってアイツを心配させちゃえ。

「おいくらですか？」

「えっと、半年分の幸せです」

女は一瞬戸惑ったが、分かりましたと答えた。

「毎度ありがとうございました」

セールスウーマンは派手な色合いの残像を女に残し、帰っていった。

女は、今のは何だったのだろう、と思いながら再びベッドに戻ろうとした。と、いきなり彼女の身体に異変が起こった。ものすごい頭痛が彼女を襲い始めたのだ。あまりの痛さに彼女はその場で頭を抱えうずくまる。じっとしていればすぐ治るだろう。最初はそう思

ったが、痛みはどんどん増し、おまけに吐き気、腹痛、寒気までが襲ってきた。しかもどれも尋常ではない。これがあのセールスウーマンが言ったビョウキなのか。こんなになるなら「死」を売りますと言って欲しかった。だったらいくら何でも買わなかったのに。気を失いそうになりながら女は部屋を見渡した。近くのテーブルの上に携帯電話が置いてある。女はわずかな力を振り絞りテーブルに近寄るとそれを手に取り、０９０から始まる夫の携帯番号を回し始める。分かっている。救急車を呼ぶ方が普通は先だと。しかし、彼女がビョウキを買ったのは夫を心配させるためなのだ。こうなったらもう女の元にいるはずのアイツに電話しながら死んで後悔させてやる。

男は家を出てからそこら辺をぶらぶらと歩いていた。パチンコや競馬などのギャンブルはもともと好きではないし、かといって、住宅地であるこのあたりには暇をつぶせる店もない。いっそのことほんとに浮気でもしてやるか。男は会社で会う女性社員を思い浮かべてみたが、どれもぴんとこない。彼が小さく笑ったとき、胸のポケットに入っていた携帯電話が鳴った。取りだした携帯のディスプレイには妻の携帯番号が光っている。謝りの電話だろうか。だとしたら珍しいことだ。男は訝しげに思いながら電話に出た。

「もしもし」

「助けて」

男は相手の声の調子に驚いた。確かに妻の声ではあるが、様子がおかしい。

「どうした？」

「あなた、助けて」

いくら何を聞いても助けて、としか答えない妻に夫は今、帰るとだけ告げて電話を切った。

切られた電話を手に女は自嘲気味に笑った。もっとおどろおどろ

しい恨み言を言ってやるつもりだったのに、助けを求めてしまうとは。しかも、今帰ると言った夫に嬉しさまで感じてしまうとは。我ながら不覚である。女は今まさに意識を手放そうとしていた。薄れゆく意識のもとで玄関のドアが勢いよく開くのを聞いた。薄れゆく意識のもとで息が上がって真っ青な夫の姿を見た。薄れゆく意識のもとで自分の身体が優しく持ち上げられるのを感じた・・・。

それから一週間ほどが経ったある日のこと。女は嘘のように元気になり家事をこなしていた。

「ただいま」

夫の帰りを告げる声を聞くと、女はばたばたと玄関に向かう。あの一件以来、夫はとても優しい。いや、恥ずかしげなく優しさを出してくれるようになったと言った方が正しいのだろう。女も夫を心から信じるようになっていた。

「これ、ポストに入ってたぞ」

男は妻に封筒を渡した。女は封を切る。見るとどうやら何かの明細書らしい。最近、買った物と言えばビョウキくらいだ。女はおそらくそれのだろうと思い、眺めた。支払料金の欄には女が結婚したはずの年月とそれから半年後の年月が書かれている。そう、新婚当初はとても幸せだった。例えば・・・そう思いかけて女ははっとした。結婚当初から半年までの間の記憶が消えている。女は、セールスウーマンの、「幸せ半年分」という言葉を思い出しながら、それは何の明細書だ、と聞いてくる夫に、内緒、と答え、リビングにあるチェストに明細書をしまい込んだ。半年分なんて安いじゃない。お買い得だったわね。女は、とても柔らかく優しい微笑を浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4434j/

病気売ります

2010年10月8日15時53分発行